

人間社会研究科

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

人間社会研究科は、時代の趨勢を見極め、現代に求められる教育を目指し、高い意識を持った教員組織とコースワークとリサーチワークを有機的に統合した教育課程を有し、現代社会に見合った形に整備されている。内部質保証委員会は研究科長経験者により構成され、研究科執行部(研究科長・専攻主任)へのヒアリングを行いながら、点検・評価の検討を行い、今後の課題について議論を進め、質保証の要であるPDCAサイクルを実質的に機能させて効率性を高めている。この質保証体制を基軸に組織と教育の改革が継続的になされていることは高い評価に値する。

教員組織においては、上記の質保証体制の他、研究科執行部が運営の責任を負い、また研究科教務委員会が組織され、ガイダンス、大学院説明会、論文発表会、シラバス点検をはじめとする必要な役割を明確に分担することにより効果的な運営を実現させている。教員組織の年齢構成もバランスが取れており、定年延長者に頼ることなく、長期的な観点に立ち、維持運営している。さらに教員の資質向上を図るため、授業改善アンケートの結果を活用し学部と共催でWell-being研究会を開催するなど、FD活動および研究活動の活性化を図っていることは評価できる。

教育に関しては、修士・博士両課程においてコースワークとリサーチワークが適切に組み合わせられた効果的な教育が行われていることは大いに評価できる。シラバスについても教務委員会が全てのシラバスをチェックするなど、確認と適切性の検証がなされている。また、2018年度開講に向け、公認心理師の受験資格に必要なカリキュラムを編成し、文部科学省および厚生労働省に申請した結果、開講科目として基準を満たすとの回答を得たことは評価できる。一方で2018年度修士課程入学者が両専攻ともに減り、入学定員充足率も低下していることから、さまざまな方策への検証と対策が望まれる。

教育・研究の両サイドから検討を進め、さらなる改善に向けての努力がなされていることは大いに評価されることである。今後も継続的な評価・検討・改善を実施し、さらなる飛躍に期待したい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

全体として高い評価をいただいた。今後も継続的に評価・検討・改善を実施して、大学評価委員会の期待に応えたい。
なお、修士課程入学者減少に対しては、両専攻で対応を検討し、2020年度からの改善策の具体化に向けて準備を進めてきた。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 コースワークとして(1)専門共通科目(福祉社会専攻)、専門基幹科目(臨床心理学専攻)、(2)専門展開科目(両専攻)を設定し、その上で、リサーチワークの演習科目(福祉社会専攻)、研究指導科目(臨床心理学専攻)を配置し、適切に開講し、教育課程を体系的に編成している。	
【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 福祉社会専攻では、修了に必要なコースワーク(18単位)を市ヶ谷で取得できるようにするため、市ヶ谷開講科目数を増やし、授業実施の在り方の見直すことの検討を進めた。2020年度の具体化に向け、2019年度中に準備を終える。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2019年度大学院要項』 ・教務委員会資料	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
【根拠資料】※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。 ・『2019年度大学院要項』	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。</p> <p>「選択・必修科目」では、福祉系・地域系・臨床心理系の科目をコースワークとして開設しており、「必修科目」としてリサーチワークに重点を置いた特別演習を設けている。</p> <p>【2018年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>カリキュラムマップ・ツリーを見直し、『大学院要項』に掲載した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・『2019年度大学院要項』</p>	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>各講義及び演習において専門分野の高度化に対応した内容の提供に努めている。</p> <p>福祉社会専攻では、「福祉社会研究法」において、研究方法論等をオムニバス形式で講義し、高度化に対応した内容を提供している。</p> <p>臨床心理学専攻の「臨床心理基礎実習」「臨床心理実習」は複数教員が担当し、臨床心理学分野の高度専門職業人として必要な臨床実践技術の講義や事例研究を行い、専門分野の高度化に対応した教育を提供している。</p> <p>【博士】</p> <p>各講義及び演習において専門分野の高度化に対応した内容の提供に努めている。</p> <p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>福祉社会専攻においては、専門分野の高度化に対応した教育内容とするため、あわせて社会人受け入れ拡充に向け、専門共通科目として設定する科目の内容及び科目名を検討してきた。2020年度の変更に向け、2019年度中に準備を終える。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・『2019年度大学院要項』</p> <p>・シラバス</p> <p>・研究科教授会資料</p>	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>海外留学への補助金、海外における研究活動補助制度、外国語論文校閲制度などを周知し、利用を促し、実績をあげている。また、福祉社会専攻では、英語専任教員による「原書講読研究」を開講し、非英語圏からの留学生及び英語圏への留学希望者を中心に、専門文献の読解を行っている。</p> <p>【博士】</p> <p>海外留学への補助金、海外における研究活動補助制度、外国語論文校閲制度などを周知し、利用を促し、実績をあげている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・応募・採用状況（研究科長会議資料）</p> <p>・シラバス</p>	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※履修指導の体制および方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>研究科教務委員会が、入学時のガイダンスで新入生全員に履修指導を行っている。</p> <p>指導教員が個別に研究テーマに則して履修を指導している。</p> <p>1年次1月に副指導教員を定め、指導を個人まかせにしていない。</p> <p>【博士】</p> <p>研究科教務委員会が、入学時のガイダンスで履修指導を行っている。</p> <p>指導教員が個別に研究テーマに則して履修を指導している。</p> <p>1年次1月に副指導教員を定め、指導を個人まかせにしていない。</p> <p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

副指導教員の決定時期を、2年次4月から、1年次1月へと早めた。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2019年度大学院要項』 ・新入生オリエンテーション・ガイダンスにおける配布資料 ・研究科教授会資料	
②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。	
【修士】 学位取得までのロードマップについては、「論文指導と研究倫理のスケジュール」を、『大学院要項』に掲載し、明示している。研究指導計画については、両専攻の「研究指導計画」を、『大学院要項』に掲載し、明示している。	
【博士】 学位取得までのロードマップについては、「論文指導と研究倫理のスケジュール」を、『大学院要項』に掲載し、明示している。研究指導計画については、「研究指導計画」を、『大学院要項』に掲載し、明示している。	
【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。 ・『2019年度大学院要項』	
③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。	
【修士】 研究科教授会において、論文構想発表、中間報告、論文提出、論文審査、論文発表、研究倫理審査などの研究指導計画を決定し、それに基づき研究科教授会として適切に実施している。	
【博士】 研究科教授会において、各年次の研究発表、予備登録、論文提出、論文審査、口頭試問、論文発表、研究倫理審査などの研究指導計画を決定し、それに基づき研究科教授会として適切に実施している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2019年度大学院要項』 ・研究科教授会議事録	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。	
【修士】 成績評価・単位認定基準を『大学院要項』に掲載、明示したうえで、適切に運用している。 修士論文の評価については、発表会を行い、適切性を確認している。 福祉社会専攻では「修士論文評価報告書」を正副指導教員が作成し、研究科教授会で成績評価と合わせて学位授与の適切性を確認している。	
【博士】 成績評価・単位認定基準を『大学院要項』に掲載、明示したうえで、適切に運用している。 年度末に「研究成果報告書」を提出させ、研究科として研究の進展を確認している。 学位論文の評価については、論文発表会を行い、適切性を確認している。	
【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 福祉社会専攻において、「修士論文評価報告書」に基づく研究科教授会の審議を行った。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2019年度大学院要項』 ・「修士論文評価報告書」 ・博士課程「研究成果報告書」	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。</p> <p>【修士】 2011年に各専攻の学位論文審査基準を制定し、2013年、2018年の一部改正を経て運用している。学位論文審査基準は『大学院要項』に掲載し、明示している。</p>	
<p>【博士】 2011年に各専攻の学位論文審査基準を制定し、2013年、2018年の一部改正を経て運用している。学位論文審査基準は『大学院要項』に掲載し、明示している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。</p> <p>・『2019年度大学院要項』</p>	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
<p>※箇条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。</p> <p>「修了年次管理表」を作成し、学位授与者数、学位授与率、学位取得までの年限などを掌握している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・「修了年次管理表」</p>	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>【修士】 専攻ごと、年度中盤に実施する論文構想発表会、年度末に実施する論文発表会には、全教員の出席を求め、活発な質問・意見交換を行っている。これにより、研究科全体として、学位論文の水準の向上と、水準の検証に努めている。</p>	
<p>【博士】 6月に実施する博士論文年次研究発表会、年度末の博士論文発表会には、全教員の出席を求め、活発な質問・意見交換を行っている。これにより、研究科全体として、学位論文の水準の向上と、水準の検証に努めている。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・博士課程では、全ての在籍学生が6月に研究発表を行うように改善した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・論文指導と研究倫理のスケジュール（『2019年大学院要項』12ページ）</p>	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
<p>※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。</p> <p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> 責任体制の明確化 4月の研究科教授会において、入学直後に提出された「指導希望教員届」に基づいて指導教員を決定し、翌年1月の教授会において副指導教員を決定している。 手続きの明確化 各専攻とも修士論文構想発表会と修士論文提出後の口頭試問を行っている。 福祉社会専攻では、加えて、修士論文構想検討会を行い、構想発表会に備えている。 適切性の確認 両専攻とも修士論文発表会を行い、福祉社会専攻では「修士論文評価報告書」を正副指導教員が作成し、研究科教授会で成績評価と合わせて学位授与の適切性を確認している。臨床心理学専攻では全教員で学位授与の判定を行っている。 	
<p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> 責任体制の明確化 指導教員承認届に基づいて4月の研究科教授会において指導教員を決定し、翌年1月の研究科教授会において副指導教員を決定している。 手続きの明確化 博士論文年次研究発表会を行い、研究内容と論文構成について指導している。 論文受理審査（1次、2次；複数名の委員が担当）に合格した論文については、学外の委員を含む複数名で構成される博士論文審査委員会で審査（口述試験を含む）を行い、その結果を踏まえて研究科教授会で可否の審議を行っている。 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>・適切性の確認 合格した博士論文については、博士論文発表会（公開）を行い、学位授与の適切性を確認している。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 副指導教員の決定を、2年次4月ではなく、1年次1月に早めた。 福祉社会専攻では、「修士論文評価報告書」に基づく研究科教授会での評価を開始した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2019年度大学院要項』 ・研究科教授会資料</p>	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 「修了年次管理表」を作成し、学生の就職・進学状況を把握している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「修了年次管理表」</p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。 【修士】 福祉社会専攻では、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標として、「修士論文評価報告書」において、I 問題意識と研究テーマ、II 先行研究の検討と独自性、III 研究方法、IV 結果の分析と考察、V 論文の記述の5つの指標を設定し、総合的に評価している。臨床心理学専攻では、分野の特性に応じた学習成果を測定するために、臨床心理士の資格取得率を確認している。 【博士】 分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標として、「研究成果報告書」から、学会発表の回数及び公表論文の本数を把握している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「修士論文評価報告書」 ・博士課程「研究成果報告書」</p>	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。 【修士】 福祉社会専攻では、「修士論文評価報告書」を正副指導教員が作成し、それをもとに研究科教授会で、具体的な学習成果の把握・評価のための議論を行っている。 臨床心理学専攻では、臨床心理士の資格取得率が90.6%に達しており、十分な成果をあげていることを把握している。 【博士】 「研究成果報告書」を毎年提出することを全員に義務付けており、それに正副指導教員のコメントを追記したものを教授会で検討している。 【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 博士課程における「研究成果報告書」の提出を、全員に義務付けた。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・研究科教授会資料、議事録</p>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【修士】 修士論文構想発表会、修士論文発表会での発表や質疑応答をもとに、研究科教授会として学習成果を検証し、教育課程及びその内容、方法の適切性について点検・評価を行っている。	
【博士】 博士論文年次研究発表会及び博士論文発表会での発表や質疑応答をもとに、研究科教授会として学習成果を検証し、教育課程及びその内容、方法の適切性について点検・評価を行っている。	
【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 博士課程では、全ての院生に、研究発表会での報告を義務付けた。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2019年度大学院要項』 ・研究科教授会議事録	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。 教務委員会において授業アンケート結果を点検している。 個別の対応が必要な場合は、執行部が対応している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・教授会議事録	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・コースワークとリサーチワークを組み合わせつつ、論文作成のプロセスの所要所で研究報告や研究成果の提出などを義務付け、着実に前進するようにしている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【FD活動を行なうための体制】 ※箇条書きで記入。 ・授業改善アンケートを各教員が資質向上のため活用している。 ・授業改善アンケートの結果を研究科教務委員会が検討し、必要な対応を行っている。 【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 研究科として研究交流会（Well-being 研究会）を開催した（2018年9月29日、現代福祉学部棟心理学実習室、テーマ「研究科 3 領域での共同研究の可能性を探る—高齢コミュニティへのアプローチ」、3 領域の専任教員と修了生からの報告、参加人数 40 名ほど）。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・研究交流会（Well-being 研究会）の開催案内	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。 研究科として、各分野の教員と修了生を交えた研究交流会を多摩共生社会研究所との共催で開催し、その後に同窓会も行うことで、研究交流と研究の活性化の場を提供している。 『現代福祉研究』（現代福祉学部紀要）に各教員の年間研究成果を掲載し、情報を共有している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・研究交流会（Well-being 研究会）開催案内 ・『現代福祉研究』

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・研究科として、研究交流会・Well-being 研究会を開催し、教員の資質向上及び、研究活動や社会貢献活動の活性化に努めている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

III 2018 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
1	中期目標	研究科設立時の理念と目的を共有しながら、常に時代の趨勢との適合性について検証を行う。	
	年度目標	国際化、地域間格差などの時代の趨勢と、本研究科での教育に求められることについて確認する。	
	達成指標	研究科教務委員会において、教育理念・目的を再確認し、時代の趨勢に対応すべき課題を協議する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	研究科教務委員会において、教育理念・目的を再確認し、時代の趨勢に対応すべき課題を協議した。
		改善策	左記に関して、引き続き検証する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	時代の趨勢に対応すべき問題を整理し、研究科教務委員会で協議されたことは評価できる。		
改善のための提言	引き続き検討を進め、研究科全体のアクションプランが共有されることを期待する。		
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	質保証委員会と研究科執行部のコミュニケーションを通じて、PDCA サイクルで研究科運営の効率性を高める。	
	年度目標	質保証委員会と研究科執行部のコミュニケーションを密に取る。	
	達成指標	年度当初（自己点検評価と目標作成時点）、中間（事業遂行時点）、年度末（年度目標達成確認時点）の3段階で、研究科執行部へのヒアリングも含めた情報交換を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	年度当初（自己点検評価と目標作成時点）、中間（事業遂行時点）、年度末（年度目標達成確認時点）の3段階で、研究科執行部へのヒアリングも含めた情報交換を行った。
		改善策	左記の情報交換を継続し、PDCA サイクルで研究科運営の的確性を高める。
質保証委員会による点検・評価			
所見	研究科執行部へのヒアリングや情報交換により、実効性のある質保証活動が可能になったことは評価できる。		
改善のための提言	引き続き情報交換を進めるとともに、情報交換と研究科のPDCA サイクルが有機的に連動する方法の検討を期待する。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	常に時代の趨勢との適合性について検証を行い、国際化や地域間格差等に対応した教育と	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		高度専門職業人養成のためのキャリア教育の提供のあり方について検討し改編する。
	年度目標	臨床心理学専攻での公認心理師指定科目に向けたカリキュラム改編、研究科全体でのカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー開示の効果について検証する。
	達成指標	左記の活用実態とホームページ掲載へのニーズについて、教務委員が新入生に対して個別ヒアリング調査を実施する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	臨床心理学専攻での公認心理師指定科目に向けたカリキュラム改編、研究科全体でのカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー開示の効果について新入生への個別ヒアリング調査で検証した。
	改善策	左記に関して、引き続き検証する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	着実に年度目標を達成していると評価できる。臨床心理士のみならず公認心理師養成にも対応した専攻として、外部にもわかりやすいカリキュラム編成がなされたと思われる。
改善のための提言	引き続き効果的な教育課程に関する検討を進めてほしい。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	研究科全体では、少人数授業で効果的な教育方法を推進する。福祉社会専攻では、社会人学生や入学者数に相応しい専門展開科目の授業数や時間割について検証し、改編する。
	年度目標	少人数授業について効果的な教育方法を学ぶとともに、専門展開科目の授業数や時間割について検討する。
	達成指標	Well-being 研究会において、少人数教育の教育方法について学ぶ。福祉社会専攻教務委員では、専門展開科目の時間割配置のあり方について議論する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	Well-being 研究会では、少人数教育の教育方法に関する検討は行えなかった。ただ、専攻ごとの研究指導計画（研究倫理と各種発表会のスケジュールを含む）を策定した。福祉社会専攻では、授業全体の構成と時間割の見直しを行い、2020年度カリキュラム改編に向けた合意を得た。
改善策	福祉社会専攻では、社会人入学生と外国人留学生など、大学院生の基礎学力の違いに注目した教育方法の検討を行う。	
質保証委員会による点検・評価		
所見	少人数授業の効果的な教育方法について検討できなかったことは次年度に向けての課題である。他方、専攻ごとにきめ細かい研究指導計画を策定したことは評価できる。	
改善のための提言	改善策に示されたように、よりきめ細かい教育方法の検討を期待する。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	学生の個別的な状況に配慮しつつ、学位基準に達するための適切な教育・研究指導を研究科全体で実施する。
	年度目標	2018年度より導入する「博士論文年次発表」と福祉社会専攻の「修士論文評価報告書」について導入成果を協議する。また、博士論文の中間審査制度も検討する。
	達成指標	左記について、研究科教務委員会で検討する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	2018年度より導入した「博士論文年次発表」と福祉社会専攻の「修士論文評価報告書」について、研究科教務委員会で導入成果を協議した。また、博士論文の中間審査制度（ステップ制）については、他大学の取り組みについて確認した。
改善策	「博士論文年次発表」と福祉社会専攻の「修士論文評価報告書」の定着化に努めるとともに	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			に、博士論文の中間審査制度（ステップ制）の導入について、具体的な検討に入る。	
		質保証委員会による点検・評価		
	所見	着実に「博士論文年次発表」や「修士論文評価報告書」について協議を始めていることは評価できる。		
	改善のための提言	今後は、左記について研究科全体で協議が進むことを期待する。		
No	評価基準	学生の受け入れ		
6	中期目標	修士課程において学部卒業生、社会人、留学生等のバランスの良い入学者の確保を図り、研究科全体の入学定員充足率を高い水準で保つ。		
	年度目標	福祉社会専攻では、社会人入学生を増やすためのターゲット絞り込みと改善策、臨床心理学専攻では、学内進学以外の入学生を増やすための改善策をそれぞれ検討する。		
	達成指標	左記について、研究科教務委員会ならびに各専攻懇談会において協議する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	福祉社会専攻では、社会人入学生をメインターゲットと設定し、仕事をしながら無理なく就学できるように、2020年度より市ヶ谷開講科目を充実させることを決定した。臨床心理学専攻では、2011年度から2018年度入試までの入学辞退者の動向をまとめ、合否判定の参考資料として活用した。	
		改善策	福祉社会専攻では、社会人入学生を増やすために、市ヶ谷キャンパスでコースワークの修了要件を満たすことができることをパンフレット等に明記し、進学相談会をすべて市ヶ谷キャンパスで開催する。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	幅広く、研究・学習意欲の高い学生を受け入れるべく、目的に沿って着実に取り組みを進めている。	
		改善のための提言	これまでの協議や決定事項を着実に進めてほしい。	
No	評価基準	教員・教員組織		
7	中期目標	教育理念・目的に合致するような専門分野の教員を配置し、かつ研究科の持続的な発展を目指した年齢構成を維持する。		
	年度目標	福祉社会専攻の専任教員の充足を行う。		
	達成指標	福祉社会専攻の専任教員1名を新規採用する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	福祉社会専攻のコミュニティマネジメント分野に専任教員1名を2019年度から新規採用することが決定した。	
		改善策	福祉社会専攻のソーシャルワーク分野の専任教員を新たに採用し、教員組織の充実を図る。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	目的に沿って着実に取り組みを進めている。	
		改善のための提言	今後も目的に沿って教員組織の充実をはかることを期待する。	
No	評価基準	学生支援		
8	中期目標	外国人留学生の教育・研究ならびに就職に関する支援をより一層充実させる。		
	年度目標	現在のチューター制度の拡充について検討する。さらに留学生の就職支援のためにキャリアセンターとの連携について検討する。		
	達成指標	左記について、研究科教務委員会で検討を重ねる。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
	理由	外国人留学生の教育・研究支援については2019年度より開講される「大学院日本語科目」		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		(大学院共通履修科目)でチューター制度を補完できるか観察することにする。就職に関しては、キャリアセンターとの懇談会を開催し、支援のあり方を協議した。	
	改善策	外国人留学生へのヒアリング調査を行い、より具体的なニーズを把握する。	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	外国人留学生の教育・研究支援について協議が進められていることは評価する。他方、早期の対応が求められる分野であり、よりスピード感を持って進めることが必要である。	
	改善のための提言	ニーズ把握を急ぎ、早めの対応を期待したい。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
9	中期目標	修了生がどのように社会と接点を持ち、貢献しているのかを常に確認するとともに、研究科が地域社会と連携し、貢献するための方策を検討し実践する。	
	年度目標	各専攻ともに、修了生どうしが情報交換し各分野の研鑽を積む場を提供する。従来同様、学内多摩共生社会研究所等との共催で公開研究会を開催する。	
	達成指標	福祉社会専攻では、修了生の進路調査を行い、同窓会の定期開催に向けた研究・活動報告会開催の検討を行う。臨床心理学専攻では、同窓会との共催による講演会・研修会を開催する。さらに学内多摩共生社会研究所、その他各種研究プロジェクト等との公開研究会を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	人間社会専攻では、各分野の教員と修了生を交えた「研究交流会」を行い(9月29日、多摩共生社会研究所との共催)、新たな情報交換の場を提供することができた。臨床心理学専攻では、2019年3月10日に2018年度の講演会・研修会を開催した。
		改善策	人間社会研究科全体の交流促進を進めるために、本年度開催した「研究交流会」を毎年継続して開催する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	研究交流会や講演会・研究会の開催により、修了生との連携による社会貢献を模索していることは評価できる。		
改善のための提言	引き続き取り組みを進めることを期待する。		
【重点目標】			
2018年度修士課程入学者が両専攻ともに減り、入学定員充足率も低下した。入学者選抜制度別の抜本的な改善策を講じるために、研究科教務委員会ならびに各専攻懇談会において協議するとともに、年次計画を立てて着手していく。			
【年度目標達成状況総括】			
研究科全体では、教育理念・目的を再度確認し、専攻ごとの研究指導計画を新たに策定するとともに、研究交流会を開催することができた。			
福祉社会専攻では、社会人入学生の確保が喫緊の課題であることを確認し、2020年度カリキュラム改編に向けて、市ヶ谷開講科目の充実について具体的な検討に入った。また、若手の専任教員を1名拡充し教員組織の年齢構成のバランスを改善した。外国人留学生の教育・研究あるいは就職の支援策についても改善されつつある。			
臨床心理学専攻では、新入生が公認心理師指定科目を受講できるようカリキュラムを改編し、新カリキュラムの運用を始めることができた。			
さらに、年度目標実現のための各種事業がきちんと遂行されているか、質保証委員会と研究科執行部とがコミュニケーションを取りながらチェックしてきた。			

IV 2019年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	研究科設立時の理念と目的を共有しながら、常に時代の趨勢との適合性について検証を行う。
	年度目標	時代の趨勢と、本研究科での教育に求められる課題について確認する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	達成指標	研究科教務委員会において、時代の趨勢に対応すべき課題を協議し、整理する。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	質保証委員会と研究科執行部のコミュニケーションを通じて、PDCA サイクルで研究科運営の効率性を高める。
	年度目標	質保証委員会と研究科執行部のコミュニケーションを密に取る。
	達成指標	年度当初（自己点検評価と目標作成時点）、中間（事業遂行時点）、年度末（年度目標達成確認時点）の3段階で、研究科執行部へのヒアリングも含めた情報交換を行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	常に時代の趨勢との適合性について検証を行い、国際化や地域間格差等に対応した教育と高度専門職業人養成のためのキャリア教育の提供のあり方について検討し改編する。
	年度目標	福祉社会専攻は、専門共通科目の内容、科目名、科目数を変更する。臨床心理学専攻は、公認心理師指定科目を含んだカリキュラムの効果と課題を検証する。
	達成指標	福祉社会専攻の専門共通科目については学則変更を行い、シラバスを検討する。 臨床心理学専攻は、左記の検証の場を持つ。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	研究科全体では、少人数授業で効果的な教育方法を推進する。福祉社会専攻では、社会人学生や入学者数に相応しい専門展開科目の授業数や時間割について検証し、改編する。
	年度目標	福祉社会専攻は、市ヶ谷開講科目数を増やし時間割を見直す。臨床心理学専攻では、心理実践実習（公認心理師指定科目）における実習教育の適切な実施について検討する。
	達成指標	市ヶ谷開講科目については時間割を確定する。 心理実践実習については臨床心理学専攻会議で実習教育の適切な進め方を議論する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	学生の個別的な状況に配慮しつつ、学位基準に達するための適切な教育・研究指導を研究科全体で実施する。
	年度目標	福祉社会専攻では修士論文評価報告書の定着に努める。臨床心理学専攻では修士論文の研究成果と、心理実践実習など臨床教育の成果との相乗効果と課題を検討する。人間福祉専攻では博士論研究発表の定着に努める。
	達成指標	修士論文評価報告書に基づき研究科教授会で審議をする。 左記の相乗効果に関する検討の場を持つ。 博士論文年次研究発表会を開催する。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	修士課程において学部卒業生、社会人、留学生等のバランスの良い入学者の確保を図り、研究科全体の入学定員充足率を高い水準で保つ。
	年度目標	福祉社会専攻では、社会人入学生増加策を具体化する。臨床心理学専攻では、従来どおりの入学者数を確保するための方策、人間福祉専攻では入学者を増やす改善策をそれぞれ検討する。
	達成指標	福祉社会専攻では市ヶ谷開講科目の科目数、時間割を変更する。臨床心理学専攻及び人間福祉専攻では、左記について各専攻会議/懇談会で検討する。その上で教務委員会、研究科教授会で議論する。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	教育理念・目的に合致するような専門分野の教員を配置し、かつ研究科の持続的な発展を目指した年齢構成を維持する。
	年度目標	福祉社会専攻の専任教員の充足を行う。
	達成指標	大学院を担当できる専任教員の新規採用をめざす。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	外国人留学生の教育・研究ならびに就職に関する支援をより一層充実させる。
	年度目標	現在のチューター制度の拡充について、「大学院日本語科目」の実施状況を把握しつつ検討する。留学生の就職支援のためにキャリアセンターとの連携について検討する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	外国人留学生へのヒアリング調査を行う。 キャリアセンターと情報交換の場を持つ。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	修了生がどのように社会と接点を持ち、貢献しているのかを常に確認するとともに、研究科が地域社会と連携し、貢献するための方策を検討し実践する。
	年度目標	各専攻ともに、修了生どうしが情報交換し各分野の研鑽を積み場を提供する。従来同様、学内多摩共生社会研究所等との共催で公開研究会を開催する。
	達成指標	人間社会研究科全体の交流促進を進めるため「研究交流会」を開催する。臨床心理学専攻では、修了生と在学生による臨床心理の会を継続発展させ、年次大会の内容のさらなる充実をはかる。
【重点目標】		
福祉社会専攻においては、専門共通科目として設定する科目の内容と数、科目名を変更する。あわせて、市ヶ谷開講科目数を増やし時間割を見直す。臨床心理学専攻においては、心理実践実習（公認心理師指定科目）における実習教育の適切な実施について検討する。人間福祉専攻では博士論研究発表会の定着に努め、博士論文提出へのプロセスを明確にする。		

V 大学評価報告書

2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価	
<p>研究科長経験者により構成された内部質保証委員会を中心とした点検・評価の継続、人間社会研究科執行部と教務委員会の分担によるガイダンス・説明会・論文発表会などの運営を効果的なものとする努力、および、学部と共催の Well-being 研究会での研究交流と質の担保、さらに公認心理師カリキュラム導入のための対応など、前年度に高く評価された努力が継続されていることは評価できる。修士課程への入学者減少については、2020年度から改善策が具体化されることなので期待したい。</p>	
1 教育課程・学習成果の評価	
①教育課程・教育内容に関すること	
<p>人間社会研究科修士課程では、福祉社会専攻・臨床心理学専攻ともに、専門共通／基幹科目と専門展開科目、そしてリサーチワークに関係する科目が設置され、方法論や実践的な実習科目に関して複数教員による指導が行われるなど、専門分野の高度化に対応した教育内容が、体系的な教育課程の下、提供されている。特に、福祉社会専攻において、社会人受け入れ拡充に向けて科目名・内容の検討が進められている点は評価できる。博士後期課程においても、福祉・地域・臨床心理に関するコースワークが設置され、リサーチワークを必修化するなど、教育課程の体系性と専門性が担保されている。海外留学への補助金、海外における研究活動補助制度、外国語論文校閲制度の利用を促すなど、グローバル化推進に向けた目配りもなされており評価できる。</p>	
②教育方法に関すること	
<p>人間社会研究科修士課程では、学位取得までのロードマップと研究指導計画が『大学院要項』に掲載されており、学位取得を目指す学生たちに明示されている。そして、論文構想から論文の完成・倫理審査、博士後期課程では年度ごとの研究発表・予備登録から論文の完成・倫理審査を経るまでの指導計画は、教授会で決定・共有され、計画に基づき、研究科教授会として、研究指導・学位論文指導が適切に行われている。入学時のガイダンスを教務委員会主導で実施し、副指導教員を置くなど、集団指導体制が確立されていること、また、より適切な指導のために副指導教員の決定時期を早めるなどの改善が実施されていることは評価できる。</p>	
③学習成果・教育改善に関すること	
<p>人間社会研究科では、学位論文審査基準を『大学院要項』に掲載して学生に周知するとともに、4月の研究科教授会において指導教員を決定し、翌年1月の研究科教授会において副指導教員を決定するなど、学位授与に関わる責任体制は適切に構築され運営されている。修士課程では論文構想発表会と論文発表会、博士後期課程では博士論文年次研究発表会（全在籍生が報告）・年度末の博士論文発表会（公開）に全教員が参加し議論することで、学位の水準を保つための取り組みも着実に進められている。また、博士後期課程においては、毎年の年度末に学生全員に「研究成果報告書」を提出させ、研究科として進展を確認している。学生の就職・進学状況も「修了年次管理表」により適切に把握されている。</p> <p>学習成果は、上記論文発表会に加えて、「修士論文評価報告書」（修士課程福祉社会専攻、臨床心理士の資格取得率（修士課程臨床心理学専攻）、学会発表の回数及び公表論文の本数（博士後期課程）によって把握されており、分野と教育課程の水準に適合的な把握の取り組みが行われていると評価できる。修士課程・博士後期課程で実施される論文発表会は、研</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>究科が提供するカリキュラムの効果を検討する資料としても活用されており、学位授与を中心とした教育・評価のシステムとして適切だと評価できる。また、学生による授業改善アンケートは、教務委員会による結果の点検や、執行部による個別対応という形で適切に活用されていると評価できる。</p>
<p>2 教員・教員組織の評価</p> <p>人間社会研究科では、授業改善アンケートの結果を適切に活用するための体制（教務委員会による検討）が構築され、適切なFD活動の基盤が形成されている。それだけでなく、各分野の教員と修了生を交えた研究交流会が、人間社会研究科と多摩共生社会研究所との共催で開催され、研究交流会後に同窓会も行われている。このことを通して、研究活性化のためのネットワーキングの努力がなされている点は高く評価できる。研究科の修了生には現場で活躍する専門職業人が多く含まれると想定されるので、研究科にとってよい循環が生まれていくものと期待される。</p>
<p>2018年度目標の達成状況に関する所見</p> <p>グローバル化や地域格差の拡大など、現代社会が直面する問題との関係で、人間社会研究科が対応すべき問題の整理が理念レベルで行われたことは評価できる。また、臨床心理学専攻でのカリキュラム改編や、カリキュラム・マップ／ツリー開示の効果について新生にヒアリングを実施するなど、教育課程改善の努力が着実になされている。2018年度は、Well-being研究会での少人数教育の教育方法の検討はできなかったとのことだが、社会人や留学生など基礎学力の違いに注目した教育方法の検討を実施する予定とのことで、同様な問題は他の研究科も抱えているはずであり、成果を期待したい。</p> <p>2018年度より導入された「博士論文年次発表」と福祉社会専攻の「修士論文評価報告書」の効果の把握がなされていること、さらに、博士論文の中間審査制度（ステップ制）について他大学からの情報収集が行われていることは、学習成果の把握に向けた有望な試みとして評価できる。</p> <p>教員組織の点でも、福祉社会専攻ソーシャルワーク分野への専任教員1名の採用（2019年度）が決定されており、研究科のカリキュラムをより充実するための試みとして評価できる。</p> <p>人間社会研究科では、すでに実施されたカリキュラム改編やカリキュラム・マップ／ツリーに関する新生ヒアリングが実施され、今後も、基礎学力の異なる入学者への教育方法に関する検討や留学生のニーズ把握が計画されるなど、教育への真摯な取り組みがなされており、大いに評価できる。</p>
<p>2019年度中期・年度目標に関する所見</p> <p>人間社会研究科では、各基準においてきわめて具体的な目標および達成指標が設定されており、おおむね適切であると思われる。修士課程福祉社会専攻は、市ヶ谷キャンパスでの開講科目数を増やすことで社会人入学者数を増加させ、それに対応した時間割など教育内容の変更が目指されている。社会人学生の増加は、特に福祉社会専攻の専門分野に鑑みて、実社会経験をもたない通常学生にもメリットをもたらす部分があると思われるが、同時に、博士後期課程や臨床心理学専攻との空間的な隔絶も生じかねない。人間社会研究科では、研究科が提供する教育内容を改善するための努力が着実に展開されており、その中で、キャンパス展開の変更がもたらす様々な影響が慎重に検討されるものと期待する。</p> <p>「研究交流会」の開催による研究科全体の交流促進や、臨床心理学専攻における「臨床心理の会」の開催など、研究交流を活性化させるための試みが企図されており、成果を期待したい。</p>
<p>法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況</p> <p>特になし</p>
<p>総評</p> <p>人間社会研究科では、修士課程・博士後期課程ともに、副指導教員をおき、適切な時期に論文発表会が開催されている。コースワークとリサーチワークの体系的な組み合わせだけでなく、定められた時期に研究報告を義務づけることで、在籍学生が修士学位・博士学位を取得するまでの行程を管理するための仕組みが工夫されている。さらに、その仕組みの効果を検証し、改善のための努力が行われている点は評価できる。また、各分野の教員と修了生を交えた研究交流会を開催し、同窓会とセットで実施するなど、人間社会研究科を基盤とした教員・在籍学生・修了生の研究ネットワーク構築と維持の努力がなされていることは、この研究科の性質上、教育上も在籍生のキャリア形成上も現場専門職とのつながりが実践的な意味で重要となることを考えると、特に評価すべき点である。</p> <p>全体として研究科の専門性に即した教育努力がなされており、それが今後も継続されることを期待したい。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。